

## (第二十二章)

二無我を詳細に説く>有（輪廻）の継続は本性が欠如すると示す>如来が本性として有ることを否定する>

[章の著述を説く]

言う。「有の継続は有るのみである。何故かといえ、如来が有る故である。如来とは、世尊、阿羅漢、正しく完成した仏陀が有る。その方が何無数劫をかけて菩提を正しく成就し、そのようにも他の経部より

『その生のその時に、私は婆羅門の子、善目という者となった。』

『その生のその時に、私はガレヌ王という者となった。』

と説かれ、有（輪廻）の継続が無ければそれは不合理であるので、それ故に有の継続は有るのみである。」

章の著述を説く>如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する>取得者が本性として成立したことを否定する> [如来が実質として有ることを否定する]

説く。もし、如来そのものが合理であるならば、有の継続も有るか？と問われるが、如来そのものが不合理であるので、その有の継続が有ると何処でなるうか。如何様にといえば、ここでもし、「如来」という何かが有るとなれば、それは諸蘊そのものか？諸蘊より他のものであるか？と問えば、それに対し、

御身ではない。御身より他でもない。

それに御身は無い。それはそれに無い。

如来は御身を具えるのではない。

如来は何ものであるか。 1

先ず、諸蘊そのものは如来ではない。何故かといえ、諸蘊は生起と壊の主体である故である。如来が無常そのものである背理となる故と、近取者と近取がまさしく同一であるとは不合理である故である。

諸蘊より他の如来である蘊の無い法（現象）は個別にも無い。何故かといえ、無常の諸蘊より異なる性質である故にまさしく恒常である背理となる故と、他そのものであるならば（そのように）認識される対象として有る背理となる故であり、認識される対象としても無いので、それ故に、諸蘊より如来は他でもない。

如来に諸蘊は、何処かにおける樹木の森の如くには無い。何故かといえ、所依（拠所）能依（依るもの）は他ではない故に、まさしく無常である背理となる故である。

諸蘊に対しても如来は、樹木の森における獅子の如くに無い。何故かといえ

ば、まさしく只今示した過失となる故である。

如来は諸蘊を、樹木が根幹を具えるが如く具えるのではない。何故かといえ  
ば、諸蘊より他でない故にまさしく無常である過失となる故である。

そのように五つの様相で探究したけれど、如来は近取にあり得なければ、君  
がそれによって有（輪廻）の継続が存在すると尽く考察した、その如来とは何  
であるかを言いたまえ。

取得者が本性として成立したことを否定する>蘊に依拠して名付けられたものが本性として有ることを否定する>蘊に  
依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する>

[蘊に依拠して名付けられたならば、本性として有るのではない]

言う。「何？吾輩が『諸蘊そのものが如来である』か、『諸蘊より如来は他で  
ある。』と言ったか？なぜ君は、吾輩に対して恒常か無常である背理となる過失  
を擦りつけるのか。吾輩は諸蘊に依拠して如来が名付けられるものであると言  
うので、依拠して名付けられるものは、近取より、それ自体か、まさしく他で  
あると言わない。それ故に、それ自体と述べられるものではない故に、無常性  
の過失とならないが、まさしく他であると述べられるのではない故に、恒常性  
の過失にならない。」

説く。何？君は善く組み立てた半分で踊るのか？君は、依拠して如来が名付  
けられるとも言うが、如来は自性よりも成立すると主張している。ならば、

もし、仏陀が蘊に  
依拠して、自性より無ければ、

もし、仏陀は諸蘊に依拠して名付けられるものであるならば、その意味とは  
仏陀は自性より無いのではないのか？このように、自性より有るものにおいて  
は、再度依拠して名付けられることによって、何をしようか。ただその自性だ  
けであるそれのみによって、名付けられものになる。何故ならば、それは自性  
が無い故に、近取によって何かが名付けられようか。そう見るので、如来は自  
性より有るのではない。

自性より無いものは、  
それが他の事物より何処に有ろうか。 2

自性より無いそれらの如来が、他の何より有ると思うのか。

蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する> [その二つが矛盾しない返答を否定する]

言う。「他の事物より一如来とは他となった近取に依拠して名付けられるものであるので、それ故に、如来は他の事物より有る。」

説く。

他の事物に依拠してあるものは、  
まさしくそれらであるとは不合理である。

他の事物に依拠して名付けられるものであるそれは、「我性がある。」と述べられることは不合理である。何故かといえば、自らより成立していない故である。

我性の無いそれが、  
如何様に如来となろうか。 3

自らの我性が無い如来であるそのものが、他となった近取によって名付けられるものであれば、如何様に如来となろうか。もし、それが自らの我性無く近取に依拠して我性が有るとなるならば、そう見れば近取に依拠して生じたとなるので、それも主張しない。(何故ならば) まさしく無常である等の過失として背理となる故である。

蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する>

[自である事物が成立していなければ、他である事物は成立していない]

また他にも、

もし、自性が無ければ、  
他の事物が有ると、如何様になろうか。  
自性と他の事物、  
以外のその如来とは何であるか。 4

もし如来は自性が無く、自性が有るのでなければ、他の事物が有ると何処でなろうか。このように、自性より他であるものを「他の事物」というならば、自性の無いそれが何より他の事物であるとなろうか。そう見るので、他の事物もまさしく有るのではない。

蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する＞ [然れば、如来は本性として無いと成立した]

ならば、自性と他の事物以外にその如来とは何であるかと、何によって名付けられるのかを言いたまえ。

蘊に依拠して名付けられたものが本性として有ることを否定する＞

[如来と蘊が、取者と取られる対象として本性によって有ることを否定する]

言う。「君は、依拠して名付けられる意味を全く知らずに多くの不合理をあるだけしゃべり、他者の言葉を侮蔑するのみでは真如の意味を尽く知ることにはできない。諸如来において、依拠して名付けられるものであるそれに対して『如来は自性より有るのか？あるいは他の事物より有るのか？』という言葉の論難は当たらない。」

説く。世間において「鬼による行為であるもの。それは幼子達が為す。」と述べられることは全く真実であり、吾輩は依拠して名付けられる意味を尽く知らぬのであるが、君はそうでないと見たまえ。君がそれに如来がまさしく有ると尽く考察した諸蘊とは、近取そのものとして不合理である。それは如何様にと  
いえば、

もし、蘊に依拠しておらず、  
如来が何か有るならば、  
それは、やっと依ることになり、  
依拠して、それからそうなるに至る。 5

もし、近取である諸蘊の以前に「如来」という何かが有り、それが諸蘊を近く取るとなるならば、そう見れば、如来は依拠して有るとなるに至る。それも生じたものに、諸蘊がそれをただ明らかにするのみのことをするとなるが、

諸蘊に依拠しておらず、  
如来は何も無い。  
依拠していないものが有るのでなければ、  
然れば、如何様に近取となろうか。 6

諸蘊に依拠しておらずに、如来は何ものも不合理であり、それは諸蘊に依拠しておらず、無ければ、無いそれによって如何様に諸蘊が近取となろうか。

言う。「学説に反したそれを説いて良いものか。このように世尊が

『輪廻に始まりと終わりは無い。』

と説かれたので、そこで近取者と近取（取られるもの）に前後関係が有ることが合理であると、何処でなろうか。それは、常に近取と共にあるので名付けられるのである。」

説く。もし、輪廻に始まりと終わりが無いので、近取者と近取は前後関係が有ることが不合理であるならば、「如来は近取者であるが、諸蘊は近く取られるものである。」というこれも不合理ではないのか？何故かといえば、このように、

近く取られたのでないものは、  
近取であると、何故ならないのか。  
近取の無い  
如来は何も無い。 7

ここで、近く取られたものなので「近取」というが、近く取ることをするので「近取者」というので、それ故に近取者によって近く取られたのでないものは近取ではない。しかし、近く取られるものを近く取ることをしていないものも、近取者ではない。輪廻に始まりと終わりが無ければ、「これが近く取られたものである。」「これが近く取る行為者である。」というそれは不合理である。

そのように前後関係が無ければ、君の諸蘊が如何様に近く取られるものであるのかと、君が尽く考察したその如来が如何様に近く取る者であるのか、それを言いたまえ。

そう見るので、前後関係が無ければ近取者もまさしく不合理であるが、近取（近く取られるもの）もまさしく不合理である。

言う。「それは合理である。何故かといえば、そのものか、まさしく他であると述べられる対象ではない故であり、近取者と近取は、そのものかまさしく他であると述べられない。

先ず、そのものであると述べられない。（何故ならば）行為者を表す言葉は別である故である。まさしく他であるとも述べられない。（何故ならば）それぞれに成立することは無い故である。そう見るので、その二つとも有り、そのものかまさしく他であると述べられ得ない。」

説く。何？君は親しい心で敵を証人とするのか。君は、ただそれだけで近取者と近取が良く成立することを不合理にする、それのみ（の理由）によって、それらが良く論立せられる為に努めている。

このように、もし近取と近取者であるものが有るとなれば、まさしく同一か、まさしく他になることに疑いは無い。まさしく同一であるとしても有るのではないが、まさしく他であるとしても有るのではないそれらが、他に如何様に有るとなろうか。そう見るので、近取もまさしく有るのではないが、近取者もまさしく有るのではない。

世間名称に従って近取者と近取を述べるとしても、まさしくそれでもなく、まさしく他でもないと言えなければならず、それはただ確実にそのように見解される。そうでなければ、我である如来と、無我である近取が、如何様にまさしく他であるとならぬのか。

阿闍梨聖提婆も、

「何故ならば色に我は無い。それ故に色より我は他となる。寒と熱がまさしく別であることは、無い、と述べられてはならぬが如く。」<sup>1</sup>

と説かれた。

取得者が本性として成立したことを否定する＞ [それらのまとめ]

もしまた、近取者であるものが有るとなれば、そう見るとしても、

五様相で探求したならば、  
そのものか、まさしく他として、  
無いその如来は、  
近取によって如何様に名付けられようか。 8

近取であるものによって名付けられたその如来であるもの自体を、五様相で探索したならば、まさしくそれか、まさしく他であると述べられる対象ではない。それが近取に無ければ、如何様に「如来は有る。」と述べられるのか。そう見るので、依拠して名付けられたことと、まさしく有ることも不合理である。

如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する＞ [取られる対象が本性として成立したことを否定する]

言う。「『近取』というこの五蘊が、先に認識されるとなる限り、如何様に無いとなろうか。それ故に、先ず近取は有る。運転者無く馬車は行かぬので、ここで近取者も有るとなる。」

説く。何？君は奔流に流されながら抜かれた根にしがみつくなか？君は近く取られたものによって近取者が良く成立させられると主張する。ある時、

<sup>1</sup> 「何故…如く。」:

近く取られるものは、  
それは自性より無い。

『近く取られるものが有る。』と思うことも、縁起生である故に、自性は無い。

言う。「それは先ず有る。仮に我の事物より有るのではなくとも、他の事物より有る。」

説く。

我の事物より無いものは、  
その如く事物より有ることは全くない。 9

自らの事物より無い近取が、他の事物より有るとなることは全く無い。我の事物が何かしら有るならば、他であるとなろうが、近取は自らの事物より有るのではないので、それ故に、それより他もまさしく有るのではない。他が無ければ、如何様に他より有るとなろうか。そう見るので、近取は他の事物よりも有るのではない。

如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する＞ [その二つのまとめ]

「現前に認識される。」と言ったことも、完全に蒙昧である自心の過失によって、幻や夢を見るが如く見えるのであるが、これにおいて正しくは僅かにも無い。（何故ならば）『これは真実である。』と思う頑かな執着を捨て去った故に、世尊が水面に浮上した泡や、水中の気泡や、逃げ水や浮き木の集まりや、幻の諸々の例を挙げられ、「この幻は幼子を欺く。」とも説かれた。何故ならば、それらは有るのではない故に、

そのように、近く取られるものと近取者は、  
一切の様相として空である。  
空であるので、空である如来を、  
如何様であれば名付けるとなろうか。 10

そのように、何故ならば、近取は自性よりも有るのではないが、他の事物よりも有るのではない故に、近取は空である。何故ならば、近取者も全ての様相で尽く考察されたならば、自性よりも有るのではないが、他の事物よりも有るのではない故に、近取者も空である。それ故に、君は「水面に浮上した泡や、

水中の気泡や、逃げ水や、浮き木の集まりや、幻のように真髓が無く、自性が空である近取によって、幻の人や、夢や、映像や、尋香の都のように精髓無く自性が空である如来が有る。」と、如何様に捏造するかを更に言及したまえ。

そう見るので、先ず、「自説に対する執着が見られるが、依拠して有ると名付ける誰か」と、『これが有るのでこれは起こるが、これが無いのでこれは起こらない。』と名付ける、まさしく依拠して有ることと、まさしく無いことを捨て去り、中庸であると論証したもの」の二人より、どちらが依拠して名付けられる意味を全く知らぬ者であるのか考えたまえ。

そう見るので、依拠して名付けられた意味とは、依拠して名付けられる事物は、一切の様相において自性が欠如する故に、まさしく有や無であると述べられるものではないのであり、世俗名称の言葉においては、過失は無い。

章の著述を説く > [それにおいて他の邪見に関するものも礎が無いと示す]

言う。「もし、そのように『それら一切は空である。』とも述べられるのでないものならば、ならば君は恥ずかしげも無く秘密をさらけ出し、『これら一切は空である。』と言うのか。」

説く。『空である。』と述べられるのでないものならば」とは、非常に少なく述べたのであり、

「空である。」とも述べず、  
 「空ではない。」ともしない。  
 二つともと、二つともでないともせず、  
 仮設される意味として述べよう。 11

「空である。」とも述べられず、「空ではない。」ともされず、「空と不空」や、「空でもない不空でもない。」とも述べられない。正しくない妄分別を捨て去る為と、勝義の真如が仮設される意味としてそれらが述べられ、以降でも

「世俗名称に依拠しておらず、聖なる義は示すことができない。聖なる義に依拠しておらず、涅槃を得るとはならない。」<sup>2</sup>

と現れる。

阿闍梨聖提婆によっても、

「もし事物に本性が有るならば、空性を見ることに如何なる功德が有ろうか。分別による束縛を見るので、ここでまさしくそれを否定せよ。」<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 「世俗・・・できない。」:『根本中論』第 24 章 10 偈。



と説かれた。

言う。「仮に、如来は自性よりも有るのではないが、他の事物よりも有るのではない。何故『恒常と無常等や、辺や無辺等と言われるものではない。』と言うのか。『如来はまさしく無い。』と、ただはっきりと述べられる正理ではないかと思う。」

説く。依拠して名付けられるものである如来を、「有る。」というか「無い」と、如何様に述べて良いものか。このように、もし如来が有るとなれば、近取が無くとも有るのみとなる道理であるが、近取が無ければ、有るのではない。近取が無ければ有るのではないものが、如何様に「有る。」と述べられるのか。何かに依拠して名付けられるその如来が、如何様に「無い。」とも述べられようか。このように、ウドゥンバラの花が無ければ、名付けられるものとして無い。そのように、何故ならばまず、如来は自性よりも有るのではないが、他の事物よりも有るのではない故に、説く。

恒常と無常等の四つが、  
寂滅したこれに、何処に有ろうか。  
辺と無辺等の四つが、  
寂滅したこれに、何処に有ろうか。 12

自性が欠如し自性が寂滅したものである如来に、恒常と無常等の四つ、「恒常である如来」、「無常である如来」、「恒常も恒常であるが無常も無常である如来」、「恒常でもなく無常でもない如来」というそれらが合理であると、何処でなろうか。

辺（限り）と無辺（無限）等の四つが、「辺が有る如来」、「無辺である如来」、「辺が有ることも有るけれど辺が無くとも無い如来」、「辺が有るのでもなく辺が無いのでもない如来」というそれらが合理であると何処でなろうか。自性と、他の事物と離れたものである、それら恒常と無常等より何れか一つとなる「如来」というそれは何であるか。何故ならば、諸蘊に依拠して名付けられるものである故に、「如来は無い。」とも述べられるものではなく、このように、依拠して名付けられるものが如何様に無となろうか。以降でも、

「そのように、近取より他ではない。それは近取そのものでもない。我

<sup>3</sup> 「もし…否定せよ。」：『四百論』第 16 章 23 偈。「もし、本性として事物が有るならば、空を見ることにいかなる功德が有ろうか。分別によって見ることは束縛であり、それをここで否定しよう。（パツァブ訳）」

は、近取が無いのではない。無そのものであるとも、それは確定しない。」

4

と現れる。

それ故に、そのように有性と無性の方向より離れた如来に、まさしく今生で依拠したにもかかわらず、認識対象として無い如来に対して愚痴によって全く包まれた心を具え、真如を見ることが隠された、

密な思い込みを保持させられた  
者は、涅槃について、  
如来が「有る」か、  
「無い」という分別で考える。 13

密な思い込みを保持するとなる『まさしくこれが真実であるが、他は無意味である。』と思う者は、涅槃を得た如来に対して、このように「如来はまさしく有る。」というか、「如来はまさしく無い。」という分別を、そのように尽く考察する。「如来は涅槃を得てから有る。」というか、「如来は涅槃を得てから無い。」というか、「如来は涅槃を得てから勿論有るが、勿論無い。」というか、「如来は涅槃を得てから有るのでもなく無いのでもない」というように考える。縁起生を知る灯明の光が心の眼に利益し諸事物を清浄に如実に見る、それら偉大なる我性の方々にとっては、

自性が欠如するそれに、  
仏陀は涅槃を得てから、  
「有る」というか「無い」という、  
思索はまさしく合理とはならない。 14

自性と他の事物が欠如する、幻や映像や変化のような、涅槃を得たその如来に、「仏陀世尊は涅槃を得てから有る。」というか、「仏陀世尊は涅槃を得てから無い。」というそれらの思惟は、まさしく合理とはならない。(何故ならば) そのようであるとしても世尊が、

「阿難よ。お前はこのように、今生において如来を清浄であると随見していなければ楽になるだろう。」

と説かれた故である。

4 「その…しない。」:『根本中論』第 27 章 8 偈。

章の著述を説く > [誤って捉えたことによる過失を示す]

「如来は涅槃を得てから存在する。」というか、「如来は涅槃を得てから無い。」という者達が、

戯論を超えて、  
無尽である仏陀について戯論を為す、  
戯論によって衰えた全ての者が、  
如来を見るとはならない。 15

それ故に、そのように、世間の一切の戯論（主客二元的に発生したもの）より正しく超越し無尽である仏陀世尊について、有と無や、恒常と無常等の諸々の戯論によって概念作用を起こすそれら一切の者は、それらの戯論によって智慧の目が衰えたことによって、生まれながらの盲人にとっての太陽の如く、如来を見ることができない。世間より超越した法（現象）に留まる如来を、有等の世間的な諸々の戯論で、如何様に見ることができようか。

「無尽」とは行くことが無い意味であり、「行くことが無い者を、如何なる歩みで導こうか。」と説かれた如くである。そう見るので、如来とはまさしく自性が無いものであるので、それに対して「有（輪廻）の継続は有るのみである。（何故ならば）如来が有る故である。」と言ったことは正理ではない。

章の著述を説く > [その正理を他にも適用する]

そこで、世間とは二様相であり、有情の世間と行（作用）の世間であると主張する。そこで如来が考察されたことによって、有情の世間も考察されたのであるが、この如来が考察されたこと自体で行の世間も考察されたと理解したまえ。何故かといえば、このように、

如来の事物そのものであるもの、  
それはこの衆生の自性である。

何故ならば、如来の自性であるものはこの衆生の自性でもある故に、まさしくこの如来が考察されたことによって、これらの衆生も考察されたのである。

言う。「如来の自性とは何か。」

説く。

如来は、事物そのものが無い。  
この衆生は自性が無い。 16

如何様にといえば、何故ならば、如来は諸蘊に依拠して名付けられるものであるが、自らより良く成立したことは無い故に、自性は無い。これらの衆生もそれやそれらに依拠して名付けられるものであるが、これらに自らより良く成立したことは僅かにも無いので、それ故に、衆生も如来の如く自性が無い。自性が無い故に、本章でも、

「恒常と無常等の四つが、寂滅したこれに、何処に有ろうか。辺と無辺等の四つが、寂滅したこれに、何処に有ろうか。」<sup>5</sup>

と説かれた。

言う。「そのようではない。有為とは一筋に『無常である』と述べられるが、如来は『無常である』とは述べられぬので、そこで

『如来の事物そのものであるもの、それはこの衆生の自性である。』

とは、如何様に合理となろうか。」

説く。それは以降よりも、

「諸仏が法を示されたことは、二諦に正しく依拠している。世間の世俗の諦（真実）と、聖なる勝義の諦（真実）である。」<sup>6</sup>

と現れるので、そこで世間の世俗の真実であるもので「壺は有る。」「垣根が有る。」と述べられる、まさしくそれによって「壺は壊れた。」「垣根が焼けた。」とそれらが無常であるとも述べられる。それのみ（真如）が単なる垣根のみである時、壺や垣根は依拠して名付けられるものであることが不合理であれば、それらが壊れた、焼けたと見て合理であると、何処でなろうか。

他にも、如来も世間の世俗に従って「如来はお年を召された。」「如来は涅槃へ入られた。」と無常であるとも述べる。勝義を思惟する時に、如来そのものが不合理であれば、「お年を召す」や「涅槃に入る」を見て合理であると、何処でなろうか。

それ故に、如来の自性であるものは、この衆生の自性でもある。そう見るので、有情の世間が考察されたことによって、行の世間も考察されたと成立した。

如来が本性として有ることを否定する > [章の名を示す]

「如来を考察する」という第二十二章である。

DECHEN 訳

<sup>5</sup> 「恒常と…有ろうか。」：『根本中論』第 22 章 12 偈。

<sup>6</sup> 「諸仏が…である。」：『根本中論』第 24 章 8 偈。